様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００００９２

研究課題名（和文）神楽の中世的展開とその変容

研究課題名（英文）Medieval Development of Kagura and its Transformation

研究代表者
斎藤　英喜（SAITO, HIDEKI）

佛教大学・歴史学部・教授

研究者番号：４０２６９６９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：神楽の中世的展開とその変容をテーマとした本研究は、とくに「中世神楽」のあらたな探求とともに、それが近世、近代へとどう展開、変貌していくか、という問題を深めることができた。その研究成果は、研究分担者の八木透、星優也との共編『歴史と地域のなかの神楽』(法蔵館)としてまとめ、2023年4月に刊行した。
研究代表の斎藤は、「序――神楽研究、さらなる深化のために」という総論と、「折口信夫の「神楽」研究・再考――「鎮魂術」をめぐって」の論文で古代から中世、近世、近代の神楽史の構想を論じた。とくに「神楽史」という視点から、歴史と地域における神楽の研究の新しい議論が始まるものと思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果としてまとめた『歴史と地域のなかの神楽』によって、これまでの古代や中世を「本質」として捉える神楽研究にたいして、歴史や地域のなかで神楽がどのように展開、変貌するかを具体的に明らかにしたことの学術的意義は高い。また上記の研究成果は、学術研究者のみならず、広く「神楽愛好者」にも読まれ、すでに重版の予定も入った。本研究の成果は、列島各地に展開する神楽を理解するうえでの社会的な意義は高いもののと思われる。今後は、学術研究者だけではない、多くの神楽に関心をもつ人々との社会的な提携などの可能性も探りたい。

研究成果の概要（英文）：This research, which deals with the development and transformation of kagura in the Middle Ages, has been able to deepen the question of how it develops and transforms from the early modern period to the modern age, along with a new exploration of 'medieval kagura'. rice field. The results of this research were published in April 2023 in a book entitled Kagura in History and Regions (Hozokan), co-edited by Toru Yagi and Yuya Hoshi.Saito, the research representative, wrote a general essay titled "Introduction: Kagura Research, Further Deepening" and a paper titled "Study and Reconsideration of Shinobu Orikuchi's 'Kagura': On 'Requiem'." He discussed the concept of modern kagura history. In particular, from the viewpoint of 'history of kagura', it is believed that a new discussion of the study of kagura in history and region will begin.

研究分野：民俗学、宗教文化論

キーワード：神楽史　歴史　地域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来、神楽研究は、折口信夫の「鎮魂(たまふり)」論を応用した西角井正慶、松前健らによる神楽が持つ「古代性」の究明、あるいは本田安次による日本各地の神楽を「巫女神楽」「出雲流神楽」「伊勢流神楽」「獅子神楽」と分類する研究、また山路興造による近世芸能との繋がりを考察する研究などが主な成果として挙げられる。それらは古代信仰論、芸態論といった研究方法といえる。

これに対して、一九八〇年代以降、岩田勝『神楽源流考』、山本ひろ子『変成譜』などの研究によって、中世神楽の世界にスポットが当てられた。岩田は中国地方(広島、山口)の山間部に伝わる「荒神神楽」「荒平舞」の実像、あるいはその土地の宗教者たちが伝えた「神楽祭文」の解読から、死者霊の鎮魂と浄化を目的とする「浄土神楽」の姿を明らかにした。また山本は、奥三河(愛知)で現在も実修される「花祭」から、その原型とされる中世末期の「大神楽」の実像を究明し、そこで繰り広げられた「浄土入り」という宗教儀礼の相貌を明らかにした。とりわけ山本の研究によって、「浄土入り」が浄土信仰のみならず「神道灌頂」という密教と結び付いた中世神道の世界に繋がることが解明された。

これらの研究によって、古代性や近世芸能とは異なる「中世固有」の神楽の世界が浮き彫りにされた。それは明治以降の近代社会では消去された神仏習合の宗教世界が、「神楽」という宗教芸能の現場から考察されることの道筋を作ったといえる。

しかし同時に「中世」という視点が、非歴史的な特権性をもつことの批判もあった。したがって、中世神楽が、さらに近世、近代の神楽としてどうのように展開、変貌したかの歴史的な解明、また列島各地域での地域的な固有性の解明が課題となったのである。

２．研究の目的

本研究の目的は、中世の列島社会に行われた「浄土神楽」の実態究明にある。そのためには浄土神楽の痕跡を伝える地域の資料を発掘し、その解読を行う。と同時に、青森県、岩手県、愛知県、高知県、島根県、広島県、宮崎県、鹿児島県の各地に伝わる神楽のフィールドワークを通して、失われた「浄土神楽」の実態を復元し、神楽の中世的な展開と、それがさらに近世、近代においてどう変貌したかを明かにすることが問われた。

こうした作業を導く研究の目的は、「神楽」の研究を民俗芸能という視点に限定することを超えて、中世に展開した神仏習合の信仰世界、とりわけ修験道、陰陽道、さらに伊勢神道、山王神道、吉田神道などの中世神道との関わりの中で明らかにする点にある。すなわち中世神道の教義、言説が地方社会にどのように伝播し、定着、変容してきたかを「神楽」の現場、またそれを担った法者、大夫、禰宜、博士と呼ばれた地域の宗教者との相関の中で捉えなおしていくことにある。それは中世の宗教世界を「思想」や「イデオロギー」の面に限定するのではなく、「神楽」という宗教芸能の実修の現場から明らかにすることが目的である。

３．研究の方法

以上の研究の目的を果たすためには、従来の研究史の再検証とともに、各地域の神楽のフィールドワーク、また地域に残された資料の解読を進めることが基本的な方法となる。

そのために「中世神楽」をめぐる研究史を再検討するための研究会を開催し、分担者・研究協力者の発表論文の合評会などを開催すること、それと並行して青森県「墓獅子」のフィールドワークとともに、「墓獅子」の詞章の解読を通して、他の地域の死者儀礼に繋がる神楽との接点と違いを明らかにしていくことが課題となった。

とりわけ「浄土神楽」が、中世神道、とくに伊勢神道、山王神道、吉田神道にどのような影響を受けているのか、それらの神道が地方に伝播する中で、いかに「神楽」として変容していくのかを『神道雑々集』『宗源神道根元式』などの文献解読から明らかにする。ここでは「神楽」の中世的展開にかかわる神観念の変容、神仏習合的な解釈から吉田神道的な解釈への変容の過程を具体的に明らかにしていく。

愛知県の「花祭」の調査とくに花太夫からの聞き取りを、とくに布川地区と下黒川地区の聞き取りから、花祭の地域的な偏差を分析することが課題となった。さらに中国地方の荒神神楽のフィールドワークそれと並行して宮崎県、鹿児島県の「神舞」のフィールドワークなどを計画したが、2020 年からのコロナパンデミックによって、フィールドワークが行えたのは、2019 年の岡山県の荒神神楽、2020 年の奥三河花祭、とくに山内地区の花太夫の家で行われた祭祀の調査に限られてしまった。また研究会も中断され、2021 年からようやく zoom での開催が可能となった。

以上のような状況をうけて、急遽、これまでの研究成果を論文化し、書籍として刊行する計画を立てた。それが次のような研究成果となった。

４．研究成果

以下、刊行した論集のタイトルと目次、その概要である。
斎藤英喜・八木透・星優也編『歴史と地域のなかの神楽』法蔵館出版

*斎藤英喜　「序」
Ⅰ部【神楽史の中世】
第一章　星優也「中世注釈と岩戸神楽説－『兼邦百首哥抄』の記述から」
第二章　松尾恒一「中世、対馬の八幡信仰、放生会と神楽―国難克服祈願としての芸能」
第三章　岡宏三「十六世紀前後の出雲における社人・巫女の組織化と荒神」
コラム１ 星優也　「歴史のなかの花祭へ　近世への射程」
Ⅱ部【神楽史の近代】
第四章　鈴木正崇「神楽の近代―大乗神楽の事例から」
第五章　鈴木昂太「神楽と国譲り神話―近代における芸能の創造」
第六章　斎藤英喜「折口信夫の「神楽」研究・再考―「鎮魂術」をめぐって」
〔コラム〕八木透「コロナ禍の都市祭礼と民俗芸能」
Ⅲ部【神楽と地域社会】
第七章　矢嶋正幸「榛名山太々講の商品性」
第八章　中嶋奈津子「「墓獅子」の変遷における一考察―岩手県と青森県八戸市を中心に」
〔コラム〕梅野光興「いざなぎ流の神楽と土佐のカグラ」

第一章／星優也「中世注釈と岩戸神楽説―『兼邦百首哥抄』の記述から」は、文明一八年(一四八六)に卜部兼邦が作成したとされる、自歌自註書『兼邦百首哥抄』を取り上げ、卜部(吉田)の神道説と神楽との関係を読み解くことで、「岩戸神楽起源説」の中世的展開を明からにした。とりわけ『兼邦百首哥抄』所収歌が「地域の神楽歌」として流布していく

ことから、応仁・文明の乱を境とした「中近世以降」の歴史状況下に、「中世的信仰世界を持った神楽言説が、多様な民間宗教者を担い手に各地域で展開し、岩戸神楽が創られていく」ことを展望した。続く第二章／松尾恒一「中世、対馬の八幡信仰、放生会と神楽―国難克服祈願としての芸能」は、文永・弘安の役以降、「朝鮮半島と国境を接した対馬の中世」という時代状況のなかで、八幡関係の神社において「国家安穏、護国の祈禱としての神楽」が奏されたことに注目し、そこに「放生会という仏教儀礼」と強く結びついた「神楽」が生まれたことを明らかにした。第三章／岡宏三「一六世紀前後の出雲における社人・巫女の組織化と荒神」は、一六世紀前後における出雲の神楽の担い手たる社家たち、神職の変遷と「荒神祭祀」、それを受容し支える「在村共同体」との関係を検証していく。そこで浮かび上がってきたのは、中世の荘郷の惣社に起源し、近世では複数の村の社家(幣下・触下)を管轄し、杵築大社、佐陀大社の支配下に属した「触頭的地位」である「幣頭」の存在、さらには村の小社、さらに荒神、御崎などの村内小祠の祭祀において鼓や笛などの奏楽でする「鼓取」(幣衆)と呼ばれる宗教者たちの実像である。とりわけ「鼓衆」の活動は、神楽や荒神祭祀を行なうだけではなく「星祭」や「呪詛返し」などの修法も扱ったことの指摘は重要である。

第四章／鈴木正崇「神楽の近代―大乗神楽の事例から」は、岩手県北上市と花巻市に伝承されている「大乗神楽」を対象に、近世までの神仏混淆、「里修験」が担ってきた神楽が、明治維新を契機にして、どのような変容を遂げたかを、現代にいたるまで追跡した。そこで見えてきたのは、地域の「里修験」が、内憂外患の社会不安のなか護国安泰・外敵調伏の祈禱を行ないつつ、神楽伝授を自らの結束・基盤の強化を推進したという幕末期の姿とともに、明治期においては、担い手の主役は「旧修験」から「農民」に移行し、民衆の間での「大乗神楽」としての「芸能色」を強め、存続した姿である。さらに鈴木論文は、明治以降の近代においても、「神仏混淆の下、人間と大地の全てが合体して宇宙を創成するドラマ」は残り続け、そのコスモロジーは「大乗會」では生成されていることの「実感」を熱く語った。

続く第五章／鈴木昂太「神楽と国譲り神話―近代における芸能の創造」は、広島県庄原市東城・西城町の神職と神楽社が伝承する比婆荒神神楽の「国譲りの能」を題材に、近代における「神楽演目」もつ特徴と、芸能の創造過程を考察した。鈴木は、すでにこの地域における近代の神楽の様相について、おもに芸能にかかわる関係者の身分、組織形態について論じているが、本論文では「台本に記された詞章」の分析を通して、「近代に芸能それ自体がどのように演じられていたのか」に迫っていく。そこで見えてくるのは、記紀神話中の表現と、明治以後の「近代国民「国家」とが混在する表現であり、また「近代の神道界」で重視された「敬神愛国」などの標語が織り込まれていく様相である。これについて鈴木論文は「神楽の現場でこそ芸であり神話は創造される」という視点を提示した。

第六章／斎藤英喜「折口信夫の「神楽」研究・再考――「鎮魂術」をめぐって」は、これまで神楽を「タマフリ」の儀礼に一元化したものと批判されてきた、折口説を読み直す。折口のタマフリ＝鎮魂術が、近代の異端系神道者たちの「鎮魂・帰神法」と通じること、そのルーツには幕末の鈴木重胤の「鎮魂」論、さらには中世神道の神人合一論の儀礼的思考が横たわっていた。さらには奥三河の「花祭」研究とは、近代における「国家の側に一元的に管理されていく神社、その神社神道に強制的に変更を迫られる地域の祭祀という現実」と向き合うものであること、それが敗戦後の神道宗教化論における「中世」の再発見という問題へと連なっていくことを明らかにした。折口の神楽研究を、近代における神楽

のもうひとつの姿として読むことを、問題提起した。

以上、神楽史の近代を射程に論じられた三篇は、とりわけ近年の近代神道史、いわゆる「国家神道」の研究動向とクロスするところが大きいだろう。新世紀にはいり、近代神道研究は、それまでの国家神道のイデオロギー批判や制度史、法制史的な研究を踏まえつつ、個別の地域の神社神職や神道家、または神道系新宗教家たちの視点から「近代」を捉えなおすという研究に進んでいる。そこではけっして一元的に国家に統制される姿だけでなく、あるいは逆に在地の神職たちが、神道と国家とのあらたな繋がりを再構築していく過程も明かにされた。神道の担い手の側から捉え返される、複雑で多元的な近代神道／近代宗教の姿を見ていくのである。本書の「II」の各論文は、こうした研究動向を受けて、それを「神楽」の担い手、奏上される台本の分析、あるいは神楽をめぐる学知の側から再検討したものといえる。その研究成果は、近代神道史研究にたいしても、あらたな知見を提示し、その研究交流が深まるものと思われる。

第七章／矢嶋正幸「榛名山太々講の商品性」では、近世後期の関東の諸地域で神社祭礼の賑わいに一役買っている「太々神楽」と地域とのかかわりを、神楽の「商品性」という視点で論じた。そこで矢島論文は、太々神楽の神事・信仰としての「本質」と、娯楽・商品としての「本音」とのあいだにひろがる「グラデーション」が、現在においても見られる「多彩な神楽」を生み出した背景を考えていく。これまでの芸態論だけでは見えてこない、地域の神楽の多様性を捉えていく視点、ということができる。第八章／中嶋奈津子「「墓獅子」の変遷における一考察―岩手県と青森県八戸市を中心に」は、旧南部領内の修験系神楽である「権現様」の演目、儀式のなかで「墓獅子」「浄土神楽の唄」「神楽念仏」と呼称される「死者供養を目的として神楽の儀式」の実態を明らかにした一篇である。とりわけ現地調査にもとづいて、岩手県北部に伝わった「墓獅子」が、明治時代に春祈禱の廻村巡業によって青森県八戸地方に他の神楽舞とともに伝承され、「それが今に残る八戸の神楽の「墓獅子」として生きていること」を明らかにした成果は大きい。

死者供養と神楽との関係は、中世末期の「浄土神楽」として列島社会に広がったことが岩田勝の研究で注目を集めたことは周知のところだ。しかしその後の鈴木正崇、鈴木昂太の批判によって、その時代的、地域的な差異の厳密さが求められることになった。とくに「死者の鎮魂供養」という認識が現代のものであることが指摘されることからも、再検討の議論が進んでいるところだ。中嶋論文による「墓獅子」は、そうした研究に寄与するところが大きいものと思われる。

かくして神楽の「地域」的特質の問題は、同時に、それが形成されていく「歴史」と不可分にあった。したがって、本論集の第三章の岡論文、第四章の鈴木正崇論文、第五章の鈴木昂太論文は、また「地域」の神楽というテーマとも共振するものであったのである。

以上、本研究の成果は、論集の刊行によって活字化され、また社会的な貢献を果たすことができた。とくに本論集は刊行後早くも重版の計画も立てられたように、神楽に関心をもつ多くの人びとに研究を開いたものと言っていいだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 斎藤英喜	４．巻 26集
２．論文標題 『日本書紀』注釈史と折口信夫の「出雲」―読み替えられた「出雲神話」をもとめて―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『日本書紀と出雲観』（島根県古代文化センター研究論集　島根県古代文化センター（編集）ハーベスト出版	６．最初と最後の頁 p268~284
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 斎藤英喜	４．巻 五月臨時増刊号
２．論文標題 異貌の〈日本宗教史〉をもとめて　折口信夫・陰陽道・いざなぎ流	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 p8-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 星優也	４．巻 五月臨時増刊号
２．論文標題 「神楽・祭文と修験道・陰陽道――奥三河花祭から――」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 p378-388
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 星優也	４．巻 第４号
２．論文標題 「大己貴神・第六天魔王同体説の形成――「虚言ヲ仰ラルゝ神」説の再検討から――」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 池坊文化研究	６．最初と最後の頁 p27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中嶋奈津子	4．巻 55号
2．論文標題 「早池峰系関口神楽の成立について」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『東北民俗』東北民俗の会	6．最初と最後の頁 PP.51～60、
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中嶋奈津子	4．巻 29号
2．論文標題 「早池峰大償神楽の師弟構造について」	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『佛教大学総合研究所紀要』佛教大学総合研究所	6．最初と最後の頁 PP.93～108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 斎藤英喜	4．巻 第十号
2．論文標題 折口信夫の「陰陽道」研究再考	5．発行年 2021年
3．雑誌名 佛教大学　歴史学部論集	6．最初と最後の頁 65-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 星優也	4．巻 第10号
2．論文標題 津軽岩木山信仰と安倍氏　『十坊縁起』を読む	5．発行年 2021年
3．雑誌名 佛教大学　歴史学部論集	6．最初と最後の頁 89-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 星優也	4．巻 第28号
2．論文標題 講式から祭文へ　『神祇講秘式』に関する一考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 摂南大学　摂大人文科学	6．最初と最後の頁 85-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 八木透	4．巻 なし
2．論文標題 島嶼社会における成人儀礼と性の伝承	5．発行年 2021年
3．雑誌名 「共助」をめぐる伝統と創造	6．最初と最後の頁 51-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斎藤英喜	4．巻 298
2．論文標題 博士・神職・太夫―土佐いざなぎ流の神楽と宗教者	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本民俗学	6．最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斎藤英喜	4．巻 3
2．論文標題 シンポジウム「中世神道と神楽」にむけて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 HERITEX	6．最初と最後の頁 72-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 星優也	4．巻 3
2．論文標題 天の祭り論―奥三河花祭の〈秘儀〉をめぐって	5．発行年 2020年
3．雑誌名 HERITEX	6．最初と最後の頁 82-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 星優也	4．巻 28
2．論文標題 薗牟田神舞「鉾舞」考―中世神道研究の視点から―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 説話・伝承学	6．最初と最後の頁 183－199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 中嶋奈津子
2．発表標題 「早池峰系関口神楽の成立と伝播について」
3．学会等名 第73回日本民俗学会年会
4．発表年 2021年

1．発表者名 星優也
2．発表標題 「『宗源神道根元式』の浄土神楽会」
3．学会等名 説話・伝承学会大会、（オンライン、事務局神戸大学）
4．発表年 2021年

１．発表者名 星優也
２．発表標題 「中世神道と時間」
３．学会等名 国際シンポジウム「中世日本の時間意識（TIMEJ）」オンライン（会場チューリッヒ大学）招待講演。（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 斎藤英喜
２．発表標題 「陰陽師からいざなぎ流へ－見えるものから〈見えない世界〉を探る技法」
３．学会等名 國學院大學　国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」
４．発表年 2020年

１．発表者名 斎藤英喜
２．発表標題 「中世神話・中世神楽への招待」
３．学会等名 島根県神職研修会「ひもろぎ会」
４．発表年 2020年

１．発表者名 星優也
２．発表標題 「いけばな「依代」起源説について」
３．学会等名 京都民俗学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 斎藤英喜
２．発表標題 桃太郎はなぜ桃から生まれるのか
３．学会等名 中京大学文学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤英喜
２．発表標題 折口信夫にとって「出雲」とはなにか
３．学会等名 島根県古代文化センター主催　共同研究　「日本書紀と出雲観に関する研究」の検討会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 斎藤英喜
２．発表標題 折口信夫の「陰陽師／陰陽道」研究と近代神道史
３．学会等名 陰陽道史研究の会
４．発表年 2019年

１．発表者名 星優也
２．発表標題 近世薩摩の神舞祭文における「天逆鉾」神話―藺牟田神舞「鉾舞」をめぐって―
３．学会等名 説話・伝承学会2019年度春季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 星優也
２．発表標題 近世の天瓊矛神話と鉾舞―南九州の神舞祭文をめぐって―
３．学会等名 伝承文学研究会京都例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 星優也
２．発表標題 「四方鬼神」考―鹿児島県薩摩川内市「入来神舞」祭文を読む―
３．学会等名 京都民俗学会第38回年次大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 斎藤英喜、八木透、星優也	４．発行年 2023年
２．出版社 法蔵館	５．総ページ数 278
３．書名 歴史と地域のなかの神楽	

１．著者名 八木透(監修)	４．発行年 2021年
２．出版社 青幻社	５．総ページ数 175
３．書名 日本の鬼図鑑	

１．著者名 斎藤英喜(共編著)	４．発行年 2020年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 441
３．書名 日本書紀1300年史を問う	

１．著者名 斎藤英喜	４．発行年 2020年
２．出版社 角川書店	５．総ページ数 302
３．書名 読み替えられた日本書紀	

１．著者名 斎藤英喜	４．発行年 2019年
２．出版社 法蔵館	５．総ページ数 518
３．書名 増補・伊弉諾流　祭文と儀礼	

１．著者名 斎藤英喜	４．発行年 2020年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 279
３．書名 前近代日本の病気治療と呪術	

１．著者名 八木透	４．発行年 2019年
２．出版社 淡交社	５．総ページ数 207
３．書名 日本の民俗信仰を知るための30章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中嶋　奈津子 (NAKAJIMA NATUKO) (50772555)	佛教大学・総合研究所・特別研究員 (34314)	
研究分担者	八木　透 (YAGI YORU) (70200475)	佛教大学・歴史学部・教授 (34314)	
研究分担者	星　優也 (HOSI YUYA) (50850583)	池坊短期大学・その他部局等・講師（移行） (44303)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関